

富士山麓病院介護医療院新聞 第164号

富士山麓クリニック



れんげ畑と新幹線と（富士市内から） 撮影：朝倉かおり（看護師）

《症例検討・111》

『拒否』できない生活

院長 清水允熙

今回は、七十五歳の女性Tさんの例です。症状は以下のとおりです。

症状

Tさんは「不安神経症」との診断で精神病院から薬をもらっていました。「眠れない」が主訴で、睡眠剤を三十年間服用しています。

当院への入院理由は、次のようなことでした。

○「家に泥棒が入っている」「トイレを使うと叱られる」「腰と足と膝が痛い」「舌がもつれる」などの訴えがあること。

○六、七年前から「物忘れ」が出現していること。最近ではぼんやりしていることもあること。入院時のTさんは「夜、薬（睡眠剤のこと）をくれますか」「オムツは換えてくれますか」と繰り返して確認し、「私は歩けない」などと言っていました。Tさんの認知症は中程度から重度への移行期にありました。

生活歴

Tさんは、東京都下の田舎で生まれました。父親は村長さんでした。権力ある家の長女として生まれ、弟が二人いました。暮らしては豊かで、村では有力者であった父親に溺愛され、性格にかなり偏った傾向をもって成長しました。小さな頃から甘ったれでわがまま、勝ち気で人に命令されるのが大嫌い、気位が高く見栄っ張りなどが際立っていました。

Tさんは父親を非常に尊敬していました。父親は早く亡くなりましたが、そのとき以来、自信をなくしたようでした。Tさんは結婚しました。夫は真面目でおとなしい人でした。Tさんは父親に比べて弱そうに見える夫に不満をもちました。父親のように頼もしい存在ではない夫は男性としての資格がないように思えたのです。父親と一緒に過ごすように虎の威を借る狐のような生活は、この夫のもとで

は無縁なものでした。ちょうどこの頃、戦争後の農地解放があり、実家が田畑を失ったことでTさんの自信はさらに崩れてしまったようでした。

子供が二人生まれました。上は女の子で下は男の子でした。Tさんにとって良き時代は、父親が生きていた時代と、二人の子供たちが成長して行く過程の時代でした。娘は結婚して家を出、息子はTさんをうるさがつて出て行きました。Tさんは睡眠剤をときどき使用するようになり、娘は二人の子を生まれました。Tさんは娘の家へ出かけて行っては、二人の孫を可愛がりました。

ここでTさんにとって不幸なことが起こりました。娘が離婚したのです。原因は娘の女性の性問題です。中学生であった孫娘二人は精神的に大変混乱しました。自分たちの母親に不満をもつて、家を出て行きました。Tさんに相談もなしにです。孫たちはTさんの住む家へ来ませ

んでした。Tさんはアパートで生活を始めました。娘もTさんの家へは来ませんでした。相談もありません。その後、Tさんと娘、孫二人のそれぞれは絶縁状態になりました。息子は相変わらずなしのつぶての状態です。ここにいるのかさえわかりませんでした。Tさんの存在価値は子供や孫たちには認めてもらえなかったのです。

睡眠障害が出現し、睡眠剤を常用するようになったのはこの頃でした。その後、成長した二人の孫娘とは、わずかの交流を続けていました。彼女たちはTさんにも母親にも相談なしに結婚をしました。そして、それぞれに子供ができました。Tさんのひ孫が生まれたのです。拒否はされても何かと孫に援助を続けていたTさんは大喜びだそうですね。しかし、今度は孫たちに相次いで離婚という事態が起こりました。この後、Tさんに精神的な変動が現れるようになり、夫と孫のひとりがT

さんの世話をするようになりましたが、症状は改善しないままでした。

経過

入院後のTさんは、常に何かを心配している様子でした。不安・心配は次のようなことでした。

- ▼衣類は何を着ればよいのか。
- ▼家族は面会に来るのかどうか。
- ▼他の患者さんや看護師さんとうまくやっていけるかどうか。
- ▼自分の健康状態は大丈夫かどうか。
- ▼今夜は眠れないかもしれない。
- ▼睡眠剤はもらえるだろうか。
- ▼病院から外出したとき、置いていかれるのではないのか。
- ▼病院にいても、自分はいるところがなくて退院させられるのではないのか。

そして、終日廊下を歩き続けていました。自信がなく、何かが気になって部屋で落ち着いていられない状態だったのです。孫が面会に来ると「一緒に帰る」と大騒ぎになることもありました。

「風呂に入っている人はみんな死んでいる」とか「みんなが殺される」など恐怖心の強い訴えも続きました。まったく笑顔のない毎日でした。

また、Tさんは次のような態度をとることがわかりました。「一緒に外出しますか」と尋ねると「行きません」と答え「一緒に外出しませんよね」と尋ねると「行きます」と答えることです。「ご飯を食べましょう」と誘うと「食べたくありません」と答え「ご飯は食べませんよね」と話しかけると「食べます」と答えることです。

なぜ、Tさんは何もかにも不安で心配なのでしょう。

また、なぜ人が言うことを『拒否・否定』する態度に出る

のでしょうか。

◎

Tさんの認知症の始まりは、今から七、八年前の六十八歳頃だと思われます。認知症に陥るにはまだまだ若い年齢です。

病院では大勢のスタッフがTさんに接しています。Tさん本人公にしての会話を続けました。いろいろなことをTさんに相談して、アドバイスを受けるようにしました。

Tさんが私たちの言うこと、提案などを『否定・拒否』することを当然のこととして対応しました。『拒否』させてあげたのです。なんでも自分の思い通りにすることができた過去をもつTさんが子供や孫たちとの生活では、何の反対も『拒否』もできず、相談さえされなかったからです。父親の話をすることが好きなので、そのことにも注意を払いました。ときには父親のことを話題の中心にすえ、Tさんには、まだ父親の威光があるかのよう話をしました。

孫のひとりもいつも病院へ来るので、協力していただきました。ただそれだけのことでは、「聞き分け」が戻ってききました。私たちが『拒否』を徹底的に受け入れたとき、『拒否』の一部は「肯定」に変わっていききました。Tさんはご自分の『拒否』をさらに『拒否』してくださったのです。正常な『拒否』が働き始めたようです。表情も明るくなり笑顔もみられるようになりました。しかし、まだ睡眠剤依存は改善しません。三十年も続けた習慣です。改善を急ぐことはいないのかもしれませんが。薬の要求を受け入れてあげることが、今の彼女には有効な治療法なのかもしれません。つまり「薬は飲まない方がよいのですよ」という私たちの意見を否定させてあげたほうがよいのかもしれませんが。

Tさんが忘れっぽいのは相変わらずですが、最近では周りの人に対しての思いやりも回復してきました。改善はもう一息の状態です。

たまたま先日はTさんの誕生日でした。スタッフのひとり「Tさん、お誕生日おめでとう」とお祝いのことばをかけた。Tさんは「誰にもそんなことを言ってもらえると思っていなかったわ。ありがとう」とニコリしました。Tさんはご自分の誕生日を大切にしていたのです。私たちは安心してました。誕生日を大切にすることは、未来を大切に考える方です。この考え方がさらにTさんを回復させてくれるはずだからです。

メモ1

子供や孫たちに何も相談されないこと、自分の存在価値を認めてもらえないこと、子供や孫たちが不幸な状態にあるとしか思えないこと、自分が願っているように事が運ばないことなどによって、Tさんは認知症の状態を予定より早めて出現させていると考えられます。お年寄り

は、自分の願いごと、期待していることなどが受け入れられない生活が続き、悲しみや絶望的な感情が続くと認知症の進行が早まります。

また、『薬物依存』の影響も認知症の早期出現に影響をもっていると考えられます。長期間にわたるある種の薬物の使用は、中枢神経に機能低下を起こさせ、了解困難な症状を呈したりする原因となることがあります。そのまま機能低下の状態が続けば中枢神経系に器質変化を起こさせてしまうでしょう。

メモ2

幼い頃からわがまま・自分勝手・勝ち気・見栄っ張りなどで自分の思い通りにならないと我慢できずに怒ってしまうような考え方で育ってきている人がいます。

祖父母・両親などから溺愛されたり、お金持ちだったり強力な後ろ盾がいたりした人たちに

多いようです。このような人たちは、自分に都合のよい考え方や生活の仕方が認められ、通用するうちはよいのですが、それができなくなると意外に弱い心をさらけ出すものです。

願っているように事が運ばない、相手にされず無視されている、自分ひとりではどうしようもない、何もできない…などを特異的に増大させて受け止めるようです。

自信を失い、不安感に駆られるなどの状態が長く続くと、恐怖感、さらには絶望感にとらわれます。その結果、精神安定剤や睡眠剤を使用して、この状況を脱しようとする人もいます。

しかし、不安感・絶望感などは一時的に消えても、薬効が薄れば、また現れてきます。したがって繰り返し薬剤が使用されます。当然です。薬剤は不安感や絶望感の原因を除去してくれないからです。Tさんもこのようにして睡眠剤を三十年間にわたり使用してきたのです。

また、Tさんのような状況は若い頃であれば神経症のような言動を出現させ、老年期であれば認知症状を出現させやすいものです。

では、どのようにしたらよいのでしょうか。方法を以下に列挙してみましよう。

- ① Tさんの考え方の変更をはかる。
- ② Tさんの感情の持ち方の変更をはかる。
- ③ 子供・孫たちのTさんに対する考え方の変更をはかる。
- ④ Tさんの不運や不幸などの定義の仕方の変更をはかる。
- ⑤ Tさんの心配やアドバイスが有効なものとなるようにはかる。
- ⑥ Tさん・子・孫などで相談し、助け合う体制を強める。
- ⑦ Tさんが安心感・満足感・充実感をもてるように問題を解決していく。

⑧ 薬剤を使用しなくてもすむように対人関係をまとめる。

⑨ 一時的な小康状態期間であっても、その都度自信を回復するよう、信頼・参加・協力関係を繰り返し確立していく。

などの実行が考えられます。



本紙に実に三〇年以上の長い間「太極悠悠」を連載して下さった中野完二先生が本年三月十一日に亡くなられました。

享年八四。謹んでご冥福をお祈りいたします。

中野完二先生の思い出

院長 清水 允熙

中野さんが、文化出版局の編集者として太極拳に関係する本の出版をお願いするため、楊名時先生にお会いしたとき

(一九七一年、昭和四十六年)のことを私は聞いております。

そのときの楊名時先生の人格があまりにもご立派でいらっしやったことに感銘し、その場で弟子入りをお願いしたそうです。「ミイラ取りがミイラになつたみたいですよ」とその時のことを嬉しそうに話してくれました。

以後、『太極拳―中国八億人民の健康体操―(現在は新装版太極拳になつている)』を出版

その後、彼は文筆の才能を発揮し、多くの出版物へ携わっていただきました。

あるとき「『太極悠悠』(彼が出版した本のタイトル)とはどのようなことを意味しているのですか?」と彼に質問すると「自分にもよくわからないけれど現在と未来を吸収していく過去の始まりみたいな状態を言うのかな」と訥々と話してくれました。

「太極と太極拳の関係は、我々の健康と友愛と平和の知恵を身体の中へ吸収させていく動きが太極拳とも言えるのかな。そして、吸収させた能力を思考を通して生活の中に還元していくといった動きを成立させる快感に至らせる関係にあると言つてもいいかもしれませぬ」とのことでした。

そして、運動そのものは「意識と呼吸と動作を一つにして、ゆつくりと動くとなかなか得難い楽しさがあります。そして健

康と友愛と平和への意志や願いが出現してくるのです」と教えてくれました。

「この動きの中で得られる楽しさとは、ある種の幸福感、つまり健康、友愛の感情、平和を願う理性などの必要性に気付かせてくれる楽しさであり、このように感じる境地が太極なのではないかと思えます」と話してくれました。

そして、我々がこの境地に少しでも近づけるように、その後も優しい忠告を送り続けてくれました。しかし、中野さんに説明して頂いても、わたしにはまだわかりませんでした。友達甲斐もなく、その状態は今も続いております。

中野先生、本当にありがとうございました。またどこか多生の縁でお会いしたときに、いろいろと教えて頂きたいと願っております。

合掌



故中野完二先生の著書・訳書・編著書の一部



二〇一六年七月 大島博光記念館(長野市松代町)にて白鶴の舞を舞う(本紙「太極悠悠」137)

内藤真治先生のご紹介

院長 清水允熙

昭和二十年ごろ、太平洋戦争が終わって間もないころ、小学校四年生の同級生の内藤君と仲良しだった。

あるとき、田畑と町を区切る境の土手で遊んでいた。そのとき彼は叢のなかに目ざとくへびを見つけた。今思うとマムシよりは大きく、シマヘビか、山かしくらいの大きさだった。

「よし、やつつけてやる」

そう言って、持ってきていた鎌を手には、彼はへびに向かって行った。威勢のよい彼にへびは頭をくだかれて動かなくなった。彼は

「これ、へび屋に持って行けばお金をくれるんだけどどうする？」と言った。

「そんなことしなくてもいいよ」と僕は答えた。

へびをそのままにして、ふた

りは彼の家へ行った。歩きながら僕は彼を『三銃士』のダルタニアンみたいだなと思った。

彼のお父さんはにわとりを一羽潰して、僕をもてなしてくれました。そのとき彼は僕に教えてくれた。

「にわとりには龍の骨が入っているんだ。龍骨と言うんだ。そこについている肉はささみと言って、とても良質の肉なんだ」

僕はそういう彼をずっと尊敬している。

その後、同じ学校を小中高と一緒に進学したが、一度も同級生になることはなかった。

内藤君は早稲田大学を卒業してから高校の先生になったが、その後聞いた噂では長年勤めた進学校から暴れん坊で成績の悪い子が多い、田舎の高校を希望して転勤したとのこと。彼は「成績が悪くても、勉強は好き」という子供たちに育てたいとてであった。

それからまた何十年も過ぎた。小学校のころの同級生は三百名ほどいたが、もう、いま残っているのは百名足らずになっていく。大勢のかけがえのない友人を失った。しかし、今も元気でいてくれる友人のなかの一人が、我が施設の新聞の編集をしてくれることになりました。

内藤真治先生です。誠に光栄なことだと思えます。きつと、よい新聞を作ってくださいることと思います。

みなさん、ご協力よろしくお願い致します。



左・内藤真治先生 中・松下常務理事 右・清水允熙院長

富士山麓病院介護医療院の「ホームページ」ご案内



当施設では認知症をご理解いただくために、これまでのノウハウを活かしたホームページを開いています。

認知症患者との接し方や認知症の状態レベル判定とその対応の仕方がわかる「NSテスト」などをご紹介します。お気軽にアクセスしてください。



<http://ninchisyo.jp>